

天王遺跡(第5次)発掘調査報告

2002年 1月

鈴鹿市教育委員会

例 言

1. 本書は、三重県鈴鹿市岸岡町に所在する天王遺跡の第5次調査に関する報告書である。
2. 調査は、大和開発株式会社による分譲住宅造成に伴い、緊急発掘調査を実施したものである。
3. 現地調査並びに報告書印刷にかかる経費は、協定書等に基づき事業者である大和開発株式会社の負担による。
4. 発掘調査は平成10年度に行なった。調査の体制は以下のとおりである（調査当時）。

事業主体 大和開発株式会社
調査主体 鈴鹿市教育委員会（教育長山下健）
調査担当 文化財保護課

組 織 林 銀哉（文化財保護課長）
中森成行（課長補佐兼埋蔵文化財係長）
岡田雅幸（指導主事）
新田 剛（副主査）
伊藤朋之（事務吏員）
杉立正徳（囑託）
豊田祥三（囑託）
5. 現地調査は豊田が担当した。
6. 本書の執筆は豊田が、編集は豊田・新田が行った。
7. 現地調査にかかる作業員の派遣は、鈴鹿市シルバー人材センターに委託した。
8. 図版における方位は、国土調査法による第Ⅵ系座標を基準とし、方位は座標北を用いた。なお磁針方位は西偏6°20′（昭和62年）、真北方位は、西偏0°18′である。
9. 挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は特に断らない限り縮尺不同である。
10. 本書で使用する用語は、以下のとおり統一した。

つき…「坏」「杯」があるが、「杯」を用いた。
わん…「椀」「碗」等があるが、「椀」を用いた。
11. 本書で用いた遺構表示略記号は、以下のとおりである。

SH：竪穴住居 SD：溝 SK：土坑 SZ：落ち込み Pit：柱穴
12. 当調査にかかる図面・写真等の記録類及び出土遺物は、鈴鹿市考古博物館において保管している。

目次

I. 前言	1	IV. 遺物	4
II. 位置と環境	3	V. まとめ	8
III. 調査の成果	6		

挿図目次

Fig. 1 遺跡分布図(1:25,000)	4	Fig. 8 大溝SD2 第4層出土遺物(1:4)	9
Fig. 2 天王遺跡周辺図(1:5,000)	5	Fig. 9 大溝SD2 出土遺物(1)(1:4)	12
Fig. 3 大溝SD2土層断面図A-A'(1:30)	7	Fig. 10 大溝SD2 出土遺物(2)(1:4)	13
Fig. 4 大溝SD2土層断面図B-B'(1:30)	7	Fig. 11 大溝SD2 出土遺物(3)(1:4)	14
Fig. 5 大溝SD2A区杭穴平面図(1:100)	8	Fig. 12 大溝SZ7・SD2出土遺物(1:4)	16
Fig. 6 竪穴住居SH1平面図(1:20)	8	Fig. 13 土坑SK11重弧文軒平瓦(1:4)	16
Fig. 7 竪穴住居SH1出土遺物(1:4)	9	Fig. 14 参考資料 天王屋敷遺跡出土瓦(1:4)	16

表目次

Tab. 1 出土遺物観察表	15	Tab. 2 報告書抄録	24
----------------	----	--------------	----

図版目次

Plate 1 1. 全景 2. 全景(北から)	19	7. 須恵器蓋(1) 8. 須恵器蓋(4)	21
Plate 2 1. 大溝SD2(東から) 2. 大溝SD2作業風景 (南東から) 3. 大溝SD2(南東から)	20	Plate 4 1. 須恵器蓋(6) 2. 須恵器杯(11)	
4. 大溝SD2遺物出土状況 5. 杭穴検出状況		3. 須恵器杯(12) 4. 須恵器杯(13)	
Plate 3 1. 大溝SD2土層断面A-A'(北西から)		5. 須恵器杯(14) 6. 須恵器長頸壺(21)	
2. 大溝SD2土層断面B-B'(南東から)		7. 須恵器壺(22) 8. 須恵器壺(23)	22
3. 竪穴住居SH1(南から) 4. 竪穴住居SH1 遺物出土状況(西から) 5. 掘立柱建物SB9 (北から) 6. 現地説明会(北から)		Plate 5 1. 木錘(28) 2. 須恵器脚付短頸壺(50)	
		3. 須恵器高杯(56) 4. 須恵器壺(59)	
		5. 土師器高杯(67) 6. 須恵器蓋(73)	
		7. 須恵器壺(75) 8. 軒平瓦(81)	23

付 図

天王遺跡遺構平面図(1:200)

I. 前 言

鈴鹿市岸岡町周辺は遺跡密集地である。近年鈴鹿医療科学大学の設立をはじめ住宅建設などの開発が著しい。とりわけ大学周辺や岸岡山丘陵は、賃貸マンションや分譲住宅の建設が多く、それに伴う発掘調査も頻繁に実施されている。

今回の調査は宅地造成に先立つ緊急発掘調査で、鈴鹿医療科学大学と鈴鹿厚生病院に挟まれた水田約2,000㎡を対象に調査を行った。

調査に際しては、事業主体である大和開発株式会社に調査経費を負担していただいた。その厚意に対して感謝の意を表したい。

現地は粘土質のため水はけが悪く、一雨降れば水浸しになり、掘削が終わった遺構が崩落するなど非常に厳しい状況にあった。それでも何とか調査を無事終えることが出来たのは、泥まみれになりながらも、きつい作業を淡々とこなしていただいた作業員各位のご尽力の賜物である。以下にご芳名を記し、感謝いたしたい。

麻生利一・川原せつ子・大久保孝子・杉本政雄・杉本ふさの・山川ふみえ・伊藤清・伊藤貞子・服部文男・加藤紀子・柳原なか・川村紀子（敬称略）

調査日誌

- 1月 5日 事業主体である大和開発株式会社と調査に関する打ち合わせ
- 1月 6日 現場に作業道具搬入
- 1月 7日 重機到着。表土除去開始（～18日まで）
- 1月 8日 調査区に3mメッシュでグリッドピンを打つ
- 1月11日 作業員投入。遺構検出開始。表土除去中に須恵器提瓶・大甕出土
- 1月12日 調査区北側の遺構検出終了
- 1月13日 検出状況の写真撮影。大溝（SD2）の2箇所サブトレンチを設定。埋土の黒色粘土層から須恵器高杯出土。調査区北端の土坑の床面（SH1）から土師器・須恵器蓋が出土。ローリングタワー搬入
- 1月14日 SH1の土器出土状況を写真撮影、実測

- 1月18日 サブトレンチ間部分の大溝掘削開始
- 1月19日 大溝掘削。雨のため午後から作業中止
- 1月20日 大溝掘削。埋土の灰色粘土層から須恵器ミニ高杯出土
- 1月21日 大溝掘削。埋土の灰色粘土層から須恵器短頸壺が良好な状態で出土
- 1月22日 大溝掘削。埋土の黒色粘土層から木錘・木の根・枝が出土
- 1月25日 大溝掘削。黒色粘土を取り除くと再び灰色粘土層がでてくるが、遺物は極めて微量である。午後の作業中、雨が降りだしたため途中で中止
- 1月26日 前日の雨のため作業中止
- 1月28日 サブトレンチ間部分の大溝掘削終了。大溝の底の両端に小穴が並んでいる
- 2月 2日 水路を挟んで南側の清掃完了。遺構の検出状況を写真撮影
- 2月 3日 大溝掘削。大溝を切る小溝SD5の掘削。午後から雪が強く降り始めたため途中で中止とした
- 2月 4日 雪のため作業中止
- 2月 5日 雪は溶けたものの、ぬかるみがひどいため午前で作業中止
- 2月 8日 大溝掘削。SD5の掘削終了
- 2月 9日 大溝掘削。ローリングタワーを組み立て、既に掘り上がった大溝の写真撮影
- 2月12日 作業員による作業中止。SD2の断面図作成
- 2月15日 調査区南端の大溝掘削にかかる
- 2月18日 雨のため午後から作業中止
- 2月19日 雨のため午後から作業中止
- 2月24日 雨のため午前中で作業中止
- 2月26日 調査区南端の大溝掘削完了。写真撮影
- 3月 1日 大溝埋没後に掘削されたピットから重弧文軒平瓦出土
- 3月 9日 大溝未掘部分の一段掘り下げに着手。雨のため午前中で作業中止
- 3月17日 航空写真撮影・図化の打ち合わせ

- 3月18日 鈴鹿市記者クラブにて記者発表
- 3月23日 大溝未掘部分の一段掘り下げが終了
- 3月24日 空撮の準備
- 3月25日 前日夜の雨のため調査区再び水浸し。
水抜きが終わるまで測量の開始を遅らせる。午後から空撮実施、無事終了。
空撮中に作業道具の洗浄。作業員による作業終了
- 3月27日 現地説明会開催。見学者30名
- 3月29日 作業道具の片付け。調査終了

II. 位置と環境

1. 位置

天王遺跡は鈴鹿川右岸の沖積平野の南端に位置し、岸岡山丘陵の北側に所在する。遺跡の北東には主として鈴鹿川から取水し、千代崎で海に注ぐ金沢川が流れる。南には田古知川が流れる。

2. 環境

本遺跡の周辺には、岸岡山Ⅲ遺跡をはじめとして多くの遺跡が所在する遺跡密集地帯である。縄文時代の遺跡としては今のところ本格的な調査例が乏しいが、岸岡山丘陵においてチャート製の尖頭器が採集されていることから、少なくとも縄文時代の早い時期から人々の生活が営まれていたと思われる。弥生時代になると周辺地域でも数多く土器片が採集されており、人々の生活の痕跡が色濃く残っている。その代表とされる遺跡が上箕田遺跡で、これまでの調査で、弥生時代前期・中期・後期の全期にわたる遺跡であることが明らかになっており、弥生土器も大量に出土していることなどから、伊勢湾西岸における拠点的な集落であったと考えられている。

その他にも、深田遺跡・大木ノ輪遺跡・須賀遺跡・岸岡山Ⅲ遺跡などの遺跡があげられるが、岸岡山丘陵の西北斜面にある岸岡山Ⅲ遺跡は平成9年に調査が行われ、後期の竪穴住居34棟を検出、最大の竪穴住居の床からは水晶も出土したことから、玉作りに関連していた集落の可能性が指摘されている。

古墳時代になると、本遺跡の北には塚越古墳群が、南東の岸岡山丘陵には岸岡山古墳群がそれぞれ形成された。塚越古墳群は、もと6基ほどが水田の中に残っていたが、逐次開墾された影響で現在は1基が残存するのみである。当古墳群からは須恵器や玉類のほか画文帯神獸鏡が出土したとされており、この平野の有力者の存在を示唆するものである。

岸岡山古墳群は38基からなる古墳群で、昭和40年には径約10mの円墳である2号墳と径約15m前後の円墳である3号墳の2基が調査され、ともに木棺直葬の主体部から須恵器、鉄製品等が出土している。平成9年には、この地域で最大規模を誇る全長55mの前方後円墳・22号墳が調査され、くびれ部から形象埴輪を含む大量の埴輪片が出土した。

天王遺跡の第3次調査では、奈良時代頃の掘立柱建物が「コの字」型に並んで発見され、何らかの公的な性格を有した機関の建物跡である可能性がある。

歴史時代になると本遺跡周辺では点的に掘立柱建物をはじめとする集落遺跡が検出されているが、注目すべき遺跡としては、白鳳期に遡るとみられる軒瓦が出土した天王屋敷遺跡が挙げられよう。当地域には、寺院が存在していたという伝承も文献上の記録も皆無であるが、戦時中に防空壕を掘った際に多くの瓦が出土したといわれていることからこの周辺に古代寺院が存在した可能性が想起される。今後の調査例を待つほかないが、古代におけるこの地域の性格を考える上で極めて重要な事項であろう。

〔参考文献〕

- 鈴鹿市教育委員会1995『海の考古学』
- 鈴鹿市教育委員会1980『鈴鹿市史 第1巻』
- 鈴鹿市教育委員会1996『鈴鹿市埋蔵文化財調査報Ⅳ』
- 鈴鹿市教育委員会1998『鈴鹿市埋蔵文化財調査報Ⅴ』
- 鈴鹿市教育委員会1999『速報展一発掘された鈴鹿'97~'98』パンフレット

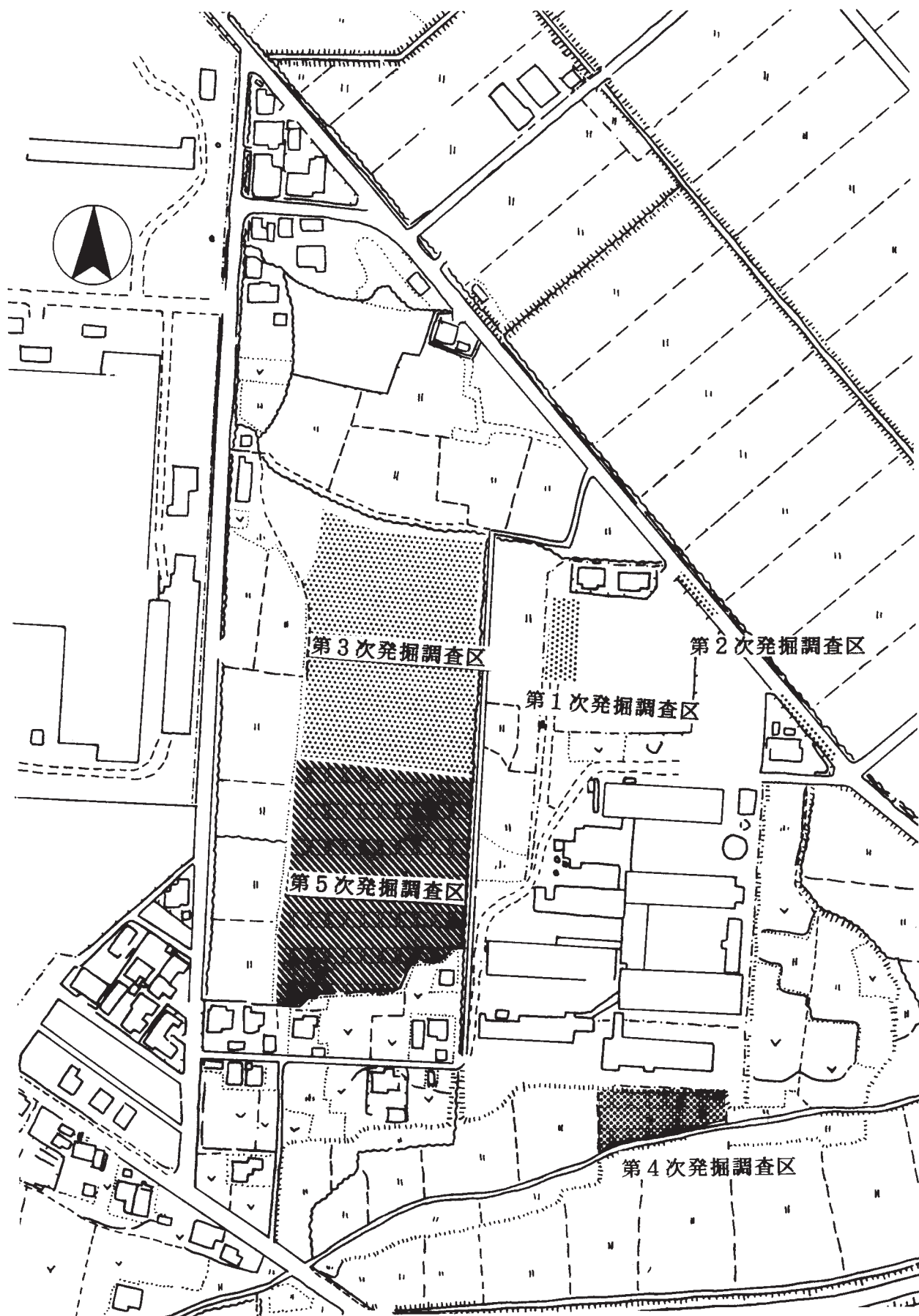


Fig.2 天王遺跡周辺図 (1 : 5,000)

Ⅲ. 調査の結果

1. 調査の方法

小地区の設定は、調査区内を3m四方の升目で区切ることによって行った。北から数字、西からアルファベットによる記号を与え、北東隅の交点における記号を組み合わせることで小地区とした。

なお今回の事業区域のうち保護措置の対象としたのは、試掘調査によって遺構の分布が認められた東半部分で、宅地造成は盛土工法によるため供用部分である道路を主に記録保存の対象とした。大きな調査結果のひとつである大溝SD2については、当事業を契機に分譲住宅の建設等が見込まれることに鑑み、地下保存となる部分における正確な位置の把握を期して、道路部分を優先的に掘削調査したのち1段掘り下げることとした。

2. 基本層序

調査区は圃場調整の際にかなりの削平を受けており、水田の耕作土である暗青灰色土を20～30cm除去すると灰白色粘質土の地山が検出される。この基盤層の上面において遺構検出を行った。

3. 遺構

古墳時代から奈良時代までの遺構が確認された。しかし、大溝SD2を除いて遺物の量は乏しく、とりわけ土師器は風化も著しいため、詳細な遺構の埋没時期は判断することができなかった。

竪穴住居SH1 調査区北端に位置し、遺構の一部は調査区外である。規模は東西3.2mで、検出面から床面までの深さは約10cmと極めて浅い。埋土は暗赤灰色粘質土で、床面付近では炭化物が混じる。柱穴は1か所確認できた。床面から須恵器蓋・土師器碗が出土しており、時期は奈良時代と思われる。

大溝SD2 調査区を南北に縦断する大溝である。調査区北端から中央部までは南西方向に伸びるが、中央部から岸岡山丘陵のある南東方向へ緩やかにカーブを描く。全長は約100m、幅約3～5m、深さは南へいくほど浅くなり、最も浅いところで約80cm、深いところで130cm程ある非常に大きなものである。断面形状は「逆台形」で、底の両端には流れに平行するかたちで直径4cm前後の小穴がおびただしい数で検出された。恐らく板止め等の護岸施設の痕跡で

あろう(註1)。掘削された時期については出土遺物が微量のため不明である。

また、上層断面からこの大溝は、一度人工的に埋め戻された後、重複するかたちで再度掘り直されていることが確認された。規模は幅約3～4m、深さは約60～100cmで前回よりもひとまわり小さい規模で掘削されている。断面形状は「船底形」で、遺物は、灰色粘質土と黒色粘質土からなる埋土の下層から多く出土した。主なものとして須恵器高杯、甕、短頸壺、木錘等がある。オリーブ灰色粘質土からなる上層からは須恵器甕、土師器高杯、甕等が出土している。

再掘削された大溝の掘削時期は6世紀後半～7世紀前半で、8世紀頃には埋没したと思われる。

溝SD3 調査区東拡張部に位置する。幅約20～60cm、深さ約20cmの小溝である。

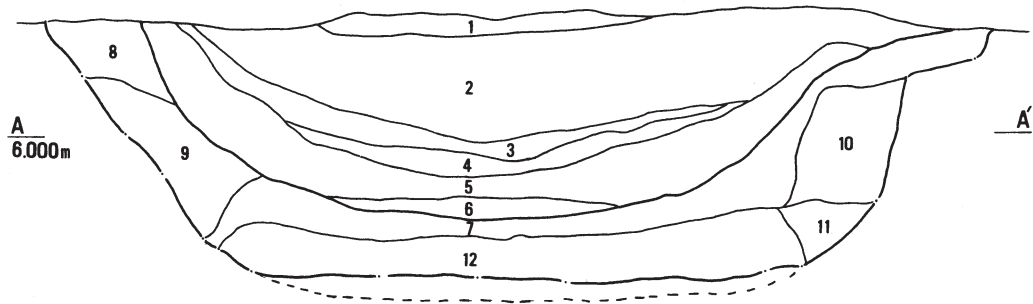
遺物はほとんど出土していないため時期は不明であるが、大溝へ流れ込んでいることから同じく7～8世紀頃のものと考えられる。排水用の小溝であろう。

小溝SD4 調査区東拡張部付近に位置する。幅約20cm、深さ約10cmの非常に小さい溝である。途中で切れているもののSB9を囲むように掘られていることから、SB9を区画する小溝であると思われる。

小溝SD5 調査区中央付近に位置する。大溝埋没後に掘削されたもので幅は約50cm、深さは約10～30cmで、西へいくほど浅くなる。時期は詳しくは不明であるが、8世紀頃と思われる。

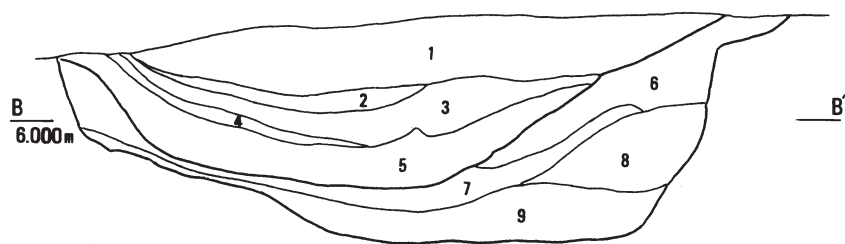
小溝SD6 調査区のやや南側にあり、SD5と同様、大溝埋没後に掘削されたものである。幅は約20cm、深さは約10cmである。遺物微量のため時期は不明。

落ち込みSZ7 調査区中央の東端に位置する。埋土から宝珠つまみをもつ須恵器蓋が出土した。7世紀頃と思われる。



- | | |
|----------------------|-----------------------------|
| 1. 黒褐色粘質土 (有機物含む) | 7. 灰色粘質土 (細礫含む) |
| 2. オリーブ灰色粘質土 (有機物含む) | 8. 灰色粘質土 (黄色粘質土ブロック・有機物含む) |
| 3. 明オリーブ灰色粘質土 | 9. 灰色粘質土 (黄色粘質土ブロック含む) |
| 4. 灰色粘質土 (細礫含む) | 10. 灰色粘質土 (黄色粘質土ブロック多く含む) |
| 5. 黒色粘質土 | 11. 淡黄色粘質土 (灰白色粘質土混じる・細礫含む) |
| 6. 灰色粘質土 (炭化物含む) | 12. 灰白色粘質土 (有機物・細礫含む) |

Fig. 3 大溝SD2 土層断面図 (A-A') (1:30)



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1. オリーブ灰色粘質土 (有機物含む) | 6. 灰色粘質土 (黄色粘質土ブロック多く含む) |
| 2. 灰色粘質土 (明黄褐色粘質土ブロック含む) | 7. 灰色粘質土 (明黄褐色粘質土ブロック含む) |
| 3. 灰色粘質土 (細礫含む) | 8. 淡黄色粘質土 (灰白色粘質土・細礫多く含む) |
| 4. 灰色粘質土 (細礫多く含む) | 9. 灰白色粘質土 (有機物・細礫含む) |
| 5. 黒色粘質土 | |

Fig. 4 大溝SD2 土層断面図 (B-B') (1:30)

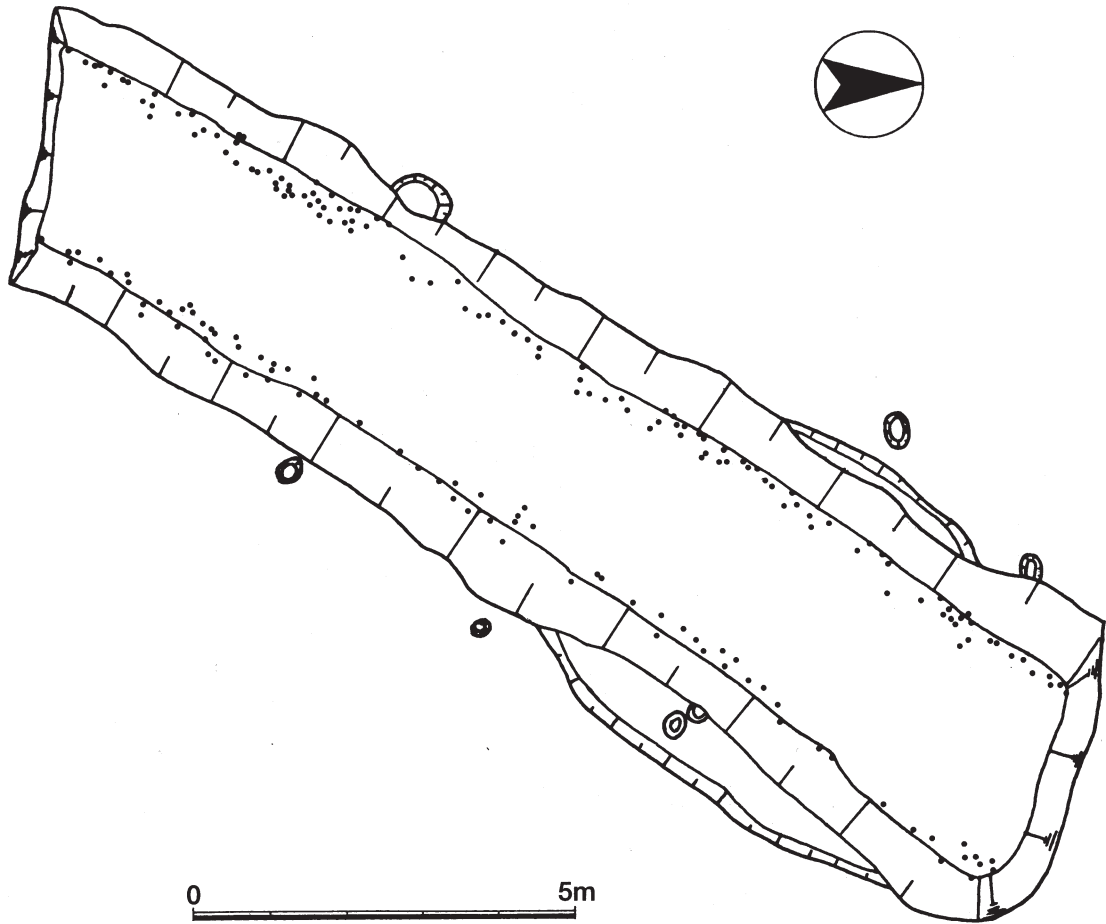


Fig. 5 大溝SD 2 A区杭穴平面图 (1 : 100)

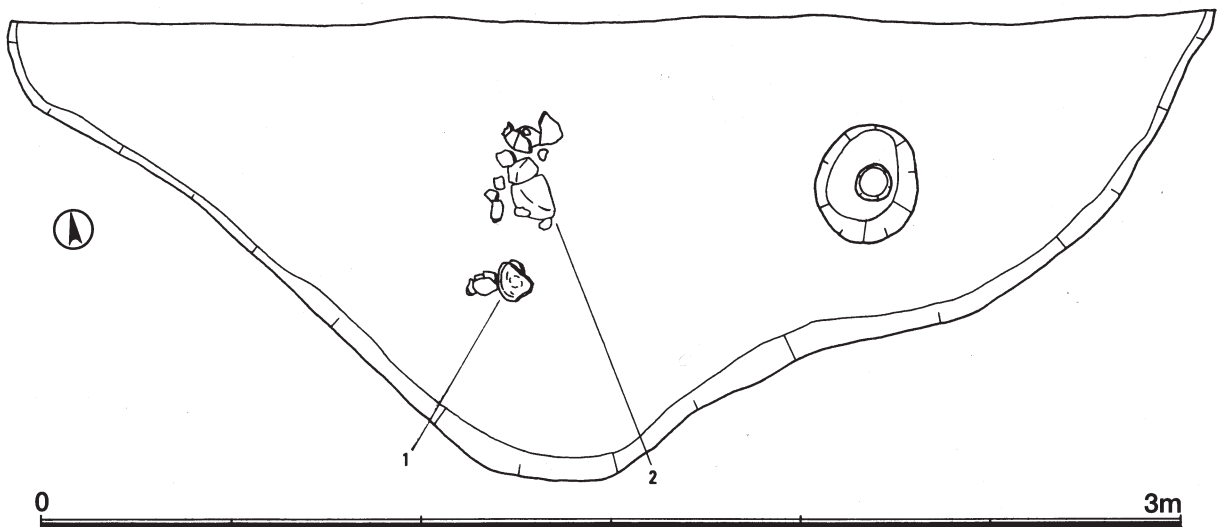


Fig. 6 竖穴住居SH 1平面图 (1 : 20)

土坑SK8 調査区のやや南側にあり、一部SD6に切られている。時期は不明である。

掘立柱建物SB9 調査区東拡張部付近に位置し、桁行2間(4.5m)×梁間2間(2.8m)である。ピットから遺物はほとんど出土しなかったため時期等は不明であるが、大溝SD2に平行するかたちで並んでいることから、大溝に伴う建物である可能性が高い。

掘立柱建物SB10 調査区中央部に位置する。水田の開墾の際にかなり削り取られたとみられ、4カ所

のピットが検出されたもののこれらに対応するピットは検出できなかった。遺物は出土しなかったため時期等詳しいことは不明である。

土坑SK11 SD2の埋没後に掘削されたもので、埋土から重弧文軒平瓦が出土した。

【註】

(1) 嬉野町教育委員会の和氣清章氏にご教示いただいた。記して感謝いたします。



Fig. 7 竪穴住居SH1出土遺物(1:4)

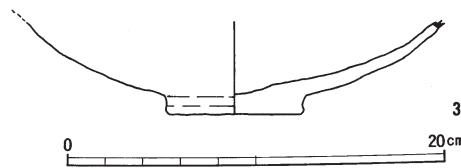


Fig. 8 SD2第4層出土遺物(縮尺1:4)

IV. 遺物

出土遺物の大半は大溝SD2から出土した。時期としては古墳～奈良時代のものが主体である。

以下出土遺物の概略を記述する。個々の遺物の詳細については出土遺物観察表 (Tab. 1) を参照されたい。

1. SH1 出土遺物 (1～2)

床面から須恵器蓋杯 (1) と土師器皿 (2) が出土した。1は口径が10.9 cmと小さく、口縁はS字状にカーブし、口縁内面端部は丸くおさめられている。天井部外面はヘラケズリされている。2は風化が著しく、調整等は不明である。8世紀頃と思われる。

2. SD2 最下層出土遺物 (3)

3はSD2最下層から出土した。弥生土器壺の底部と思われる。

3. SD2 黒色粘質土層出土遺物 (4～33)

須恵器杯類、椀、高杯、短頸壺、長頸壺、甗、大甗、すり鉢、土師器甗、台付甗、二重口縁壺がある。

須恵器蓋 (4～10)

1類 (註1) 4には天井部と口縁部の間の稜の段が残り、口縁端部内面は段状をなす。天井部外面は丁寧なヘラケズリが施される。

2類 5～6は、緩やかに膨らむ天井部を持ち、天井部と口縁部の間の稜は、わずかに残る。口縁部は外側に膨らみ、端部内面は段状をなす。天井外面にはヘラケズリが施される。

3類 7は天井部と口縁部の間の稜がわずかに残るものの、口縁端部内面の段が失われ、丸くおさめられる。天井外面にはヘラケズリが施される。10は壺の蓋と思われる。9は天井部と口縁部の間の稜が失われ、口縁端部も丸く、ヘラケズリも省略されている。

須恵器杯身 (11～14) 須恵器杯身は口縁端部内面が内傾し、痕跡化した段をもつ一方で、ヘラケズリは底部外面に丁寧に施されるなど、やや古相の要素が残存している。中には底部外面のほとんどに施されている個体もみられ、全体的に個々の形態にばら

つきがみられる。また、生焼けの個体 (12) もある。須恵器高杯 (16～18) 16は、脚部4方に方形透かしがあげられている。上段には透かしをあける箇所が目印とおもわれる沈線が引かれているものの、穿孔はされていない。17の杯部には列点文が、18には脚部にヘラ状の工具によって沈線が施されている。

須恵器長頸壺 (21・29) 21・29とも底面から胴部下部にわたり広範囲にヘラケズリが施される。

須恵器甗 (22) 胴部・頸部中央部は板状工具によって刺突され、それぞれ上下には凹線が施される。底部は丁寧にヘラ削りされている。

須恵器壺 (23) 胴部の肩部にヘラ状の工具によって斜め方向に列線が施され、その上下には凹線が施される。底部外面には手持ちヘラケズリが施される。

須恵器大甗 (27) 口縁部のみ残存する。外面は板状工具によって刺突されている。

土師器 (30～33) 土師器に関しては、風化が著しく、良好な資料を得ることができなかった。甗の破片と思われるものが大半を占めるが、二重口縁壺 (32)・台付甗 (33) も出土している。

木製品 (28) 大溝の第3層からは、木の根、枝などの小片が出土したが、木製品は木錘 (註2) 1点のみである。台形を呈し、底部は丸みを帯びる。

黒色粘質土層の遺物には、混入と思われる遺物が若干みられるものの、脚付短頸壺が出土していないなど、杯類以外の器種の特徴から考慮すると、6世紀後半頃 (註3) のものと思われる。

4. SD2 オリーブ灰色粘質土層出土遺物 (34～81)

須恵器杯類、椀、高杯、小型高杯、脚付短頸壺、短頸壺、甗、大甗がある。

須恵器杯蓋 (34～36・42) 34は黒色粘質土層でもみられた緩やかに膨らむ天井部を持ち、天井部と口縁部の間の稜がわずかに残るタイプ (2類) のものである。口縁部は外側に膨らみ、端部内面は段状をなす。天井外面にはヘラケズリが施される。35は、天井部と口縁部の間の稜が失われるが、口縁端

部内面は内傾する。天井外面にはヘラケズリが施される。36は壺の蓋と思われる。天井部と口縁部の間の稜は残存するものの口縁端部内面は丸くおさまられている。42は高杯の蓋であろう。

須恵器杯身（37～41） 37は外側に膨らみながら内傾する長い立ち上がりを持ち、口縁端部内面に痕跡化した段を持つ。底部外面にはヘラケズリが施される。38は立ち上がりが短くなり、蓋受け部は突帯状に若干張り出す程度である。ヘラケズリは省略されており、平底状である。39～40は、立ち上がりが短く内傾し、短く張り出す三角突帯状の蓋受け部が一体となっている。ヘラケズリは省略されている。

須恵器脚付短頸壺（44～53）（註4）岸岡山周辺を中心として出土する特異な器種である。今回の調査では比較的多くの資料を得ることができた。体部は丸く膨らみ、やや長めでほぼ直立（50）、ないしはわずかに外反する口縁部（44～48）をもつ。底部外面はヘラケズリが施される。脚部はラッパ状に開くが、脚端部は外側に急に広げたのちに下方に小さく折り曲げるものと、矩形にするものがある。

須恵器高杯（56～58） 56は内傾する長い立ち上がりを持つ杯部を持ち、口縁端部内面の段の痕跡はほとんど失われている。脚部に透かしは無く、短くラッパ状に開き、脚端部は外側に広げたのちに丸くおさまっている。生焼けのため燈色を呈する。57は小型の高杯であるが、焼成時の歪みがみられ、使用されることなく廃棄されたものであろう。58は焼成時における歪みがみられる。

須恵器毬（59～60） いずれの個体も口縁部を欠く。59は胴部がやや下脹れ状に膨らみ、平底である。胴部中央に2条の沈線をひいた後に穿孔されている。頸部にも2条の沈線がみられる。底部外面にはヘラケズリが施される。60には沈線は施されていないが、底部外面には丁寧にヘラケズリが施されている。

須恵器平瓶（62） 口縁部が欠損している。体部下半にヘラケズリが施されている。

須恵器短頸壺（63～65） いずれの個体も胴部を欠く。63には、自然釉が付着している。

須恵器大甕（66・74） 66は、頸部から口縁部まで残存する。外面にはタタキが施され、内面には巻き上げ痕が残る。74には胴部外面全体にタタキが

施され、内面は丁寧にナデられており、焼成時に生じた焼き膨れが多くみられる。

須恵器把手付壺（75） 口縁部を欠く。胴部上半部はナデ、下半部はタタキによって調整されている。上半部には沈線の痕跡化したものがみられる。内面は丁寧にナデられている。

土師器（67～72） 67～68は高杯、69～72は甕である。71は外面にタテハケを、内面にはナメ方向のハケメを施す。奈良時代前期のものと思われる。

土錘（80） 大溝から出土したが、第2層からしか出土していない。

2層の遺物についてはやや混入遺物などもみられるものの、7世紀～8世紀前期までの時間幅におさまるものが主体である。

5. S Z 7 出土遺物

須恵器蓋（79）埋土から出土した。7世紀頃のものと思われる。宝珠つまみをもつ。

6. その他

81は大溝埋没後の土坑より出土した重弧文軒平瓦片（註5）である。凹面には布目がみられ、重弧文が施される。この他にも布目瓦片は数点みられるが、実測可能な破片はなかった。

なおS D 2第1層からは土師器の小片が多く出土したが、実測可能なものはみられなかった。

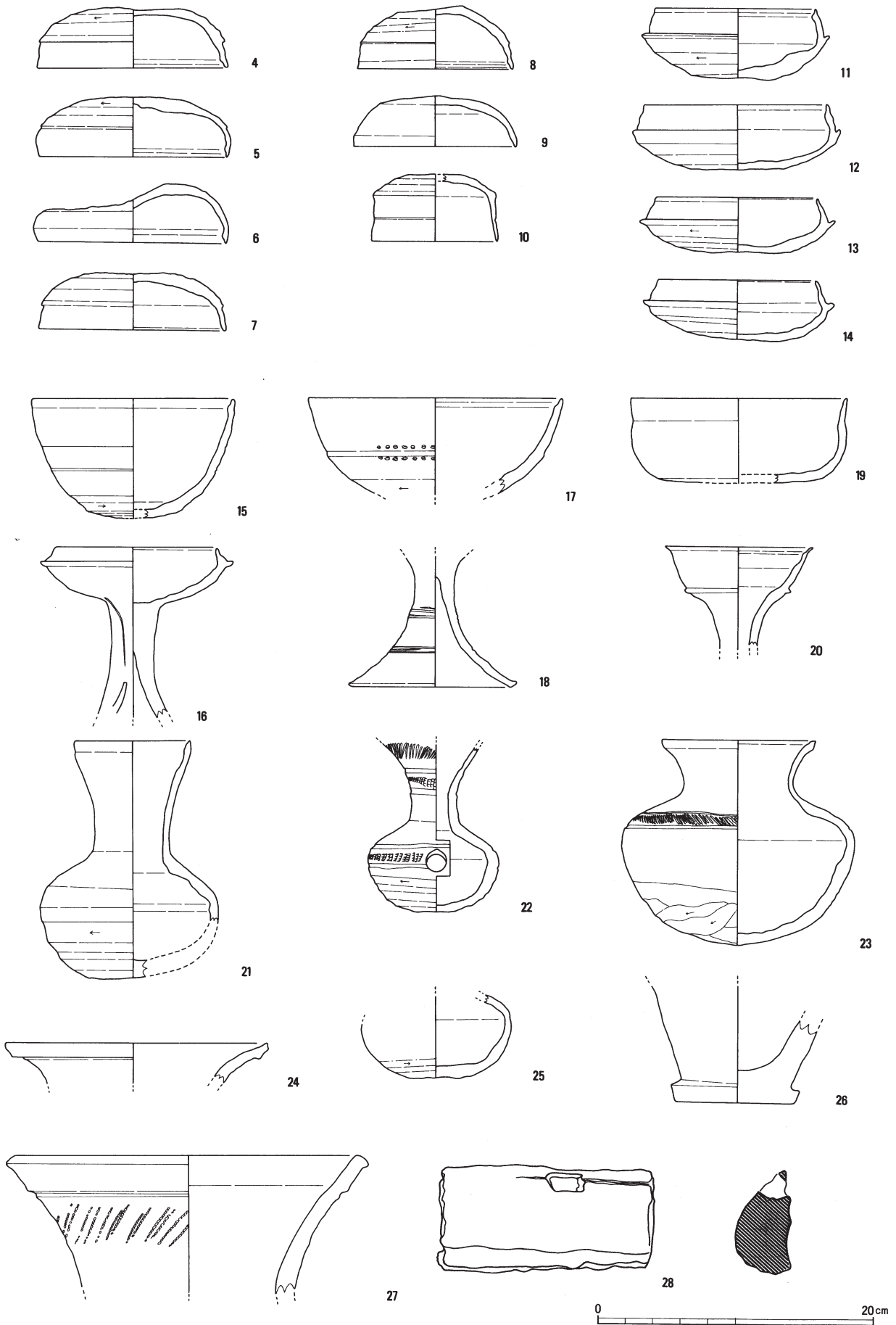


Fig. 9 大溝SD2出土遺物(1) (1 : 4)

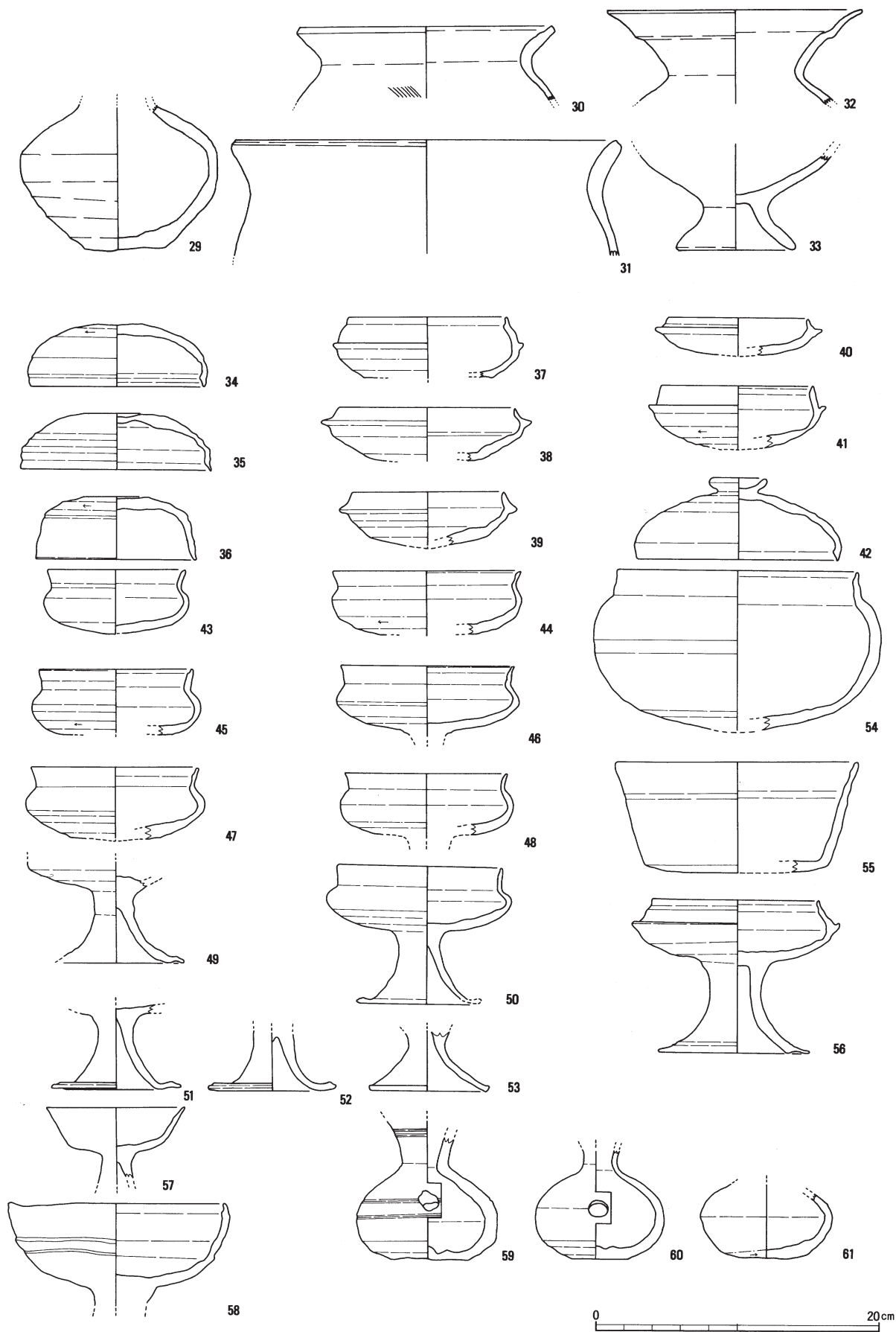


Fig.10 大溝SD2出土遺物(2) (1 : 4)

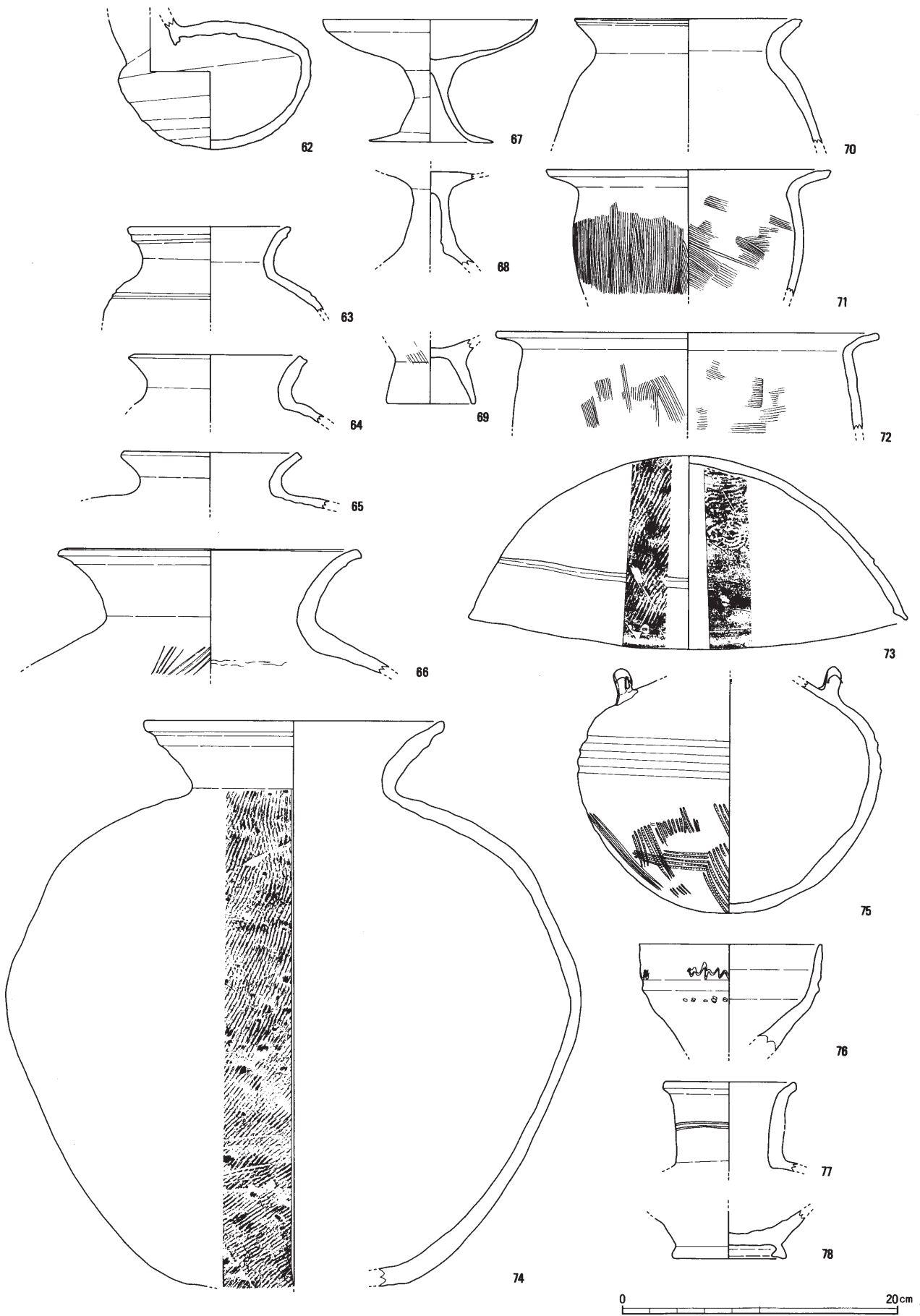


Fig.11 大溝SD2出土遺物(3) (1 : 4)

Tab. 1 出土遺物観察表

No.	器種	地区	遺構・層名	計測値	調整技法の特徴	胎土	色調	残存	備考
1	須恵器 蓋	Q1	SH1	10.9	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰色	ほぼ完存	
2	土師器 椀	Q1	SH1	—	風化のため不明	粗	淡橙色	口縁1/3	
3	弥生土器 壺?	P28	SD2第4層	—	風化のため不明	粗	にぶい黄橙	底部残存	黒斑あり
4	須恵器 蓋	J9	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰色	口縁1/14	
5	須恵器 蓋	I15	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/4	
6	須恵器 蓋	I15	SD2第3層	13.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/2	
7	須恵器 蓋	O27	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/2	
8	須恵器 蓋	O27	SD2第3層	11.4	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁3/5	
9	須恵器 蓋	J27	SD2第3層	11.7	回転ナデ	密	明青灰	ほぼ完存	
10	須恵器 蓋	O27	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	暗青灰	口縁1/3	壺の蓋か
11	須恵器 杯	I15	SD2第3層	11.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	完存	
12	須恵器 杯	O27	SD2第3層	13.0	回転ナデ→回転ケズリ	密	淡黄	口縁1/2	
13	須恵器 杯	O27	SD2第3層	11.6	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	ほぼ完存	
14	須恵器 杯	O27	SD2第3層	11.5	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/10	
15	須恵器 椀	K8	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/3	
16	須恵器 高杯	L5	SD2第3層	11.7	回転ナデ→回転ケズリ →脚部に穿孔	密	灰	脚裾欠損	
17	須恵器 高杯	O27	SD2第3層	—	→列点文	密	青灰	口縁1/16	自然釉付着
18	須恵器 高杯	O27	SD2第3層	—	回転ナデ→凹線	密	青灰	脚部完存	
19	須恵器 椀	O26	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	暗青灰	口縁1/3	
20	須恵器 甕	O27	SD2第3層	10.6	回転ナデ	密	暗青灰	口縁3/4	
21	須恵器 長頸壺	K6	SD2第3層	8.4	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	底部やや欠損	
22	須恵器 甕	O27	SD2第3層	—	回転ナデ→沈線→穿孔 →施文	密	青灰	胴部完存	鉄分付着
23	須恵器 壺	L8	SD2第3層	11.0	回転ナデ→ケズリ→沈 線→ヘラによる刺突	密	青灰	口縁やや欠損	
24	須恵器 甕	J9	SD2第3層	19.0	回転ナデ	密	青灰	口縁2/3	
25	須恵器 長頸壺?	I15	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	胴部やや欠損	
26	須恵器 すり鉢	K7	SD2第3層	—	回転ナデ	密	灰白	底部完存	自然釉付着
27	須恵器 大甕	K8	SD2第3層	—	回転ナデ→沈線→刺突	密	灰白	口縁1/3	
28	木製品 木鉢	L8	SD2第3層	—	—	—	—	ほぼ完形	
29	須恵器 長頸壺	J9	SD2第3層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁部欠損	
30	土師器 甕	J16	SD2第3層	—	風化のため不明	粗	灰白	口縁1/5	
31	土師器 甕	M21	SD2第3層	—	ナメハケ	粗	にぶい黄橙	口縁1/3	
32	土師器 二重口縁壺	J16	SD2第3層	—	風化のため不明	粗	淡黄	口縁1/4	
33	土師器 台付甕	O27	SD2第3層	—	風化のため不明	粗	にぶい黄橙	脚裾1/3	
34	須恵器 蓋	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/3	
35	須恵器 蓋	P28	SD2第2層	—	回転ナデ	密	青灰	口縁1/3	
36	須恵器 蓋	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ →胴部に沈線	密	灰白	口縁1/10	
37	須恵器 杯	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/5	焼き膨れあり
38	須恵器 杯	L5	SD2第2層	—	回転ナデ→底部無調整	密	青灰	口縁1/4	
39	須恵器 杯	L5	SD2第2層	—	回転ナデ→底部無調整	密	青灰	口縁1/6	
40	須恵器 杯	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/4	
41	須恵器 杯	P28	SD2埋土	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/3	
42	須恵器 蓋	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/3	高杯の蓋か
43	須恵器 埴	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/3	
44	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/3	
45	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/3	
46	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/6	
47	須恵器 脚付短頸壺	O27	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/4	
48	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/3	
49	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	口縁1/3	
50	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	暗赤灰	口縁1/4	
51	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	脚部残存	
52	須恵器 脚付短頸壺	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	脚部残存	
53	須恵器 脚付短頸壺	P27	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰	脚部残存	
54	須恵器 埴	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	口縁1/3	
55	須恵器 椀	P28	SD2第2層	—	回転ナデ	密	灰白	口縁1/3	
56	須恵器 高杯	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	灰白	ほぼ完形	
57	須恵器 小型高杯	L6	SD2第2層	9.8	回転ナデ	密	青灰	口縁1/2	歪みあり

58	須恵器	高杯	P28	SD2第2層	15.3	回転ナデ→凹線	密	暗青灰	口縁1/3	歪み大きい
59	須恵器	甗	J10	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ →胴部に沈線・穿孔	密	青灰	胴部完存	
60	須恵器	甗	J10	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ →胴部に穿孔	密	青灰	胴部完存	
61	須恵器	長頸壺?	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→回転ケズリ	密	青灰	胴部やや欠損	
62	須恵器	平瓶	O26	SD2第2層	—	ナデ→回転ケズリ	密	灰白	胴部完存	
63	須恵器	短頸壺	M23	SD2第2層	11.8	回転ナデ→胴部に沈線	密	暗青灰	口縁部完存	
64	須恵器	短頸壺	K21	SD2第2層	13.0	回転ナデ	密	青灰	口縁1/4	自然釉付着
65	須恵器	甗	L21	SD2第2層	—	回転ナデ	密	灰白	口縁1/3	
66	須恵器	大甗	L6	SD2第2層	22.2	回転ナデ→外面タタキ, 内面指ナデ	密	灰白	口縁1/4	
67	土師器	高杯	L6	SD2第2層	15.6	風化のため不明	密	橙	口縁1/16	
68	土師器	高杯	L6	SD2第2層	—	風化のため不明	粗	灰白	脚柱1/3	
69	土師器	台付甗	P28	SD2第2層	底径6.5	タテハケ	粗	にぶい橙	脚裾3/4	
70	土師器	甗	K21	SD2第2層	—	風化のため不明	密	灰白	口縁1/3	
71	土師器	甗	J9	SD2第2層	—	タテハケ,内面ヨコハケ	密	にぶい黄橙	口縁1/8	煤付着
72	土師器	甗	L5	SD2第2層	—	タテハケ,内面ヨコハケ	粗	淡黄橙	口縁1/3	
73	須恵器	陶棺蓋?	P28	SD2第2層	32.0	タタキ→沈線,内面タタキ	密	青灰	ほぼ完形	鉢の可能性あり
74	須恵器	大甗	O26	SD2第2層	—	タタキ,内面ナデ	密	青灰	胴部1/2欠損	焼き膨れあり
75	須恵器	把手付壺	Q29	SD2第2層	—	回転ナデ→タタキ凹 回転ナデ→列点文→波 状文	密	青灰	口縁欠損	
76	須恵器	蓋	P28	SD2第2層	—	回転ナデ→沈線	密	青灰	口縁1/3	
77	須恵器	蓋	K8	SD2第2層	9.6	回転ナデ	密	青灰	口縁完存	
78	須恵器	蓋	M4	SD2第2層	—	回転ナデ→ヘラケズリ	密	青灰	底部完存	
79	須恵器	蓋	N12	SZ7	10.2	回転ナデ→ヘラケズリ	密	青灰	口縁部欠損	
80	土師器	土鉢	P28	SD2第2層	—	凸面横位調整, 施文後 分割?	粗	にぶい黄藤橙	口縁1/2	
81	重弧文軒平瓦		J9	SK11	—		密	灰白	瓦当一部残	三重弧, 凹面に布目痕

[註]

1. ここでの分類は藤原秀樹の分類(藤原秀樹1995「岸岡山2号窯跡出土の須恵器について」『海の考古学』鈴鹿市教育委員会)による。
2. 三重県埋蔵文化財センター穂積裕昌氏にご教示いただいた。記して感謝致します。
3. 田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店
4. この器種名については高杯の一種として認識される場合もあるが,ここでは混乱を避けるため藤原の呼称にならう。
5. 森郁夫1986「瓦」ニュー・サイエンス社

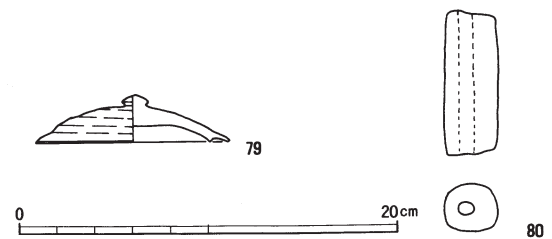


Fig.12 SZ7・SD2出土遺物 (1:4)



Fig.13 SK11重弧文軒平瓦 (1:4)

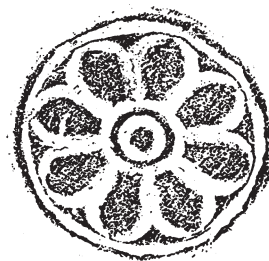


Fig.14 参考資料 天王屋敷遺跡出土軒丸瓦 (1:4)

V. まとめ

今回の第5次調査では、全長約100mにわたる大溝を検出し、比較的良好な須恵器の資料も得ることができた。ここでは大溝を中心として、今回の調査の成果について述べたい。

1. 遺構

今回の調査では、調査区を縦断するかたちで全長約100m、幅約4～5mという非常に大きな溝を検出した。当初は自然流路の可能性も考えられたが、溝の肩が確実に押さえられるという点や、溝の底の両端に流れに平行するかたちで板止めの痕跡と思われる小穴が並んで検出されたという事からも人工的に掘削されていることは間違いない。また大溝は何らかの建物を囲むように緩やかにカーブを描いているだけでなく、遺跡近辺の地割とほぼ平行するかたちで曲がっていることから、掘削当初は付近を流れる金沢川と田古知川を結ぶ運河の役割を果たしていた可能性が考えられる。

大溝は一旦埋没した後再掘削されたが、掘り直された溝は、溝周辺をはしる小溝がこの溝へ流れ込んでいることからみて、運河というよりはむしろ排水用の溝として利用されていた可能性が高い。

今回の調査区の北側の第3次調査区(註1)で「コ」の字型に並んだ8世紀頃とみられる掘立柱建物群が発見され、火災で失われた後に同じ場所にすぐに立て替えられることから恒久的な建物であった可能性が示唆されている。掘り直された溝は掘立柱建物群が存在した8世紀頃までは機能し、排水と建物の区画を兼ねていたものと思われる。

2. 遺物

溝の埋土からは、一括資料とはいえないものの、多くの土器が出土した。なかでも須恵器は6世紀後半～7世紀頃のものを中心に、バラエティに富んでおり、県内の同時期の須恵器と比較しても(註2)形状のみならず、ヘラケズリの範囲や口径の大小などで、様相を異にする。とりわけ注目されるのは比較的まとまった数の資料が得られた脚付短頸壺である。脚付短頸壺の生産が確認された窯としては岸岡

山窯跡群が知られ、天王遺跡出土のものもその特徴から大半が遺跡の南東に存在する岸岡山窯跡群で生産されたものと思われる。

3. 遺跡の性格について

出土遺物と過去の4次にわたる調査成果を踏まえ、天王遺跡の性格を積極的に推察してみたい。

今回検出された大溝は何らかの建物を囲むように緩やかにカーブを描いている。大溝に伴う建物跡としては、大溝に平行して建てられていたSB9、比較的規模の大きいSB10が考えられるが、遺物がほとんど出土しなかったため、確証はない。しかし今回出土した脚付短頸壺(註3)や、第3次調査で出土した県内では珍しい知多式製塩土器(註4)の出土が物語るように他地域との交流が活発であった点、岸岡山窯跡群で生産されたと思われる須恵器が多く出土している点、当遺跡の南東約500mには当時多くの古墳が築造されていた岸岡山丘陵がそびえている点などを考慮すれば、当時この地に伊勢湾を媒介とした海上交易に通じた豪族の居館が存在し、この地域の物流の拠点として機能していた可能性を示唆するものといえる。大溝がその居館の濠の一部である可能性も残されていよう。

また、SK11からは重弧文軒平瓦が出土し、包含層からも布目瓦が数点出ているが、まとまった量では出土せず、寺院跡と思われる遺構も検出できなかった。当遺跡の近辺に白鳳時代に遡る古代寺院が存在した可能性は極めて高いものの、寺院の範囲からは外れていると考えられる。

今回の調査では大溝を除き、明確に遺跡の性格を窺い得るような遺構は発見できなかったが、今後の調査で、よりその全貌が明らかになることを期待したい。

[註]

1. 鈴鹿市教育委員会1997天王遺跡(第3次)現地説明会資料
2. 古代の土器研究会1999「近畿東部及び東海地域の7世紀の土器」[古代土器研究1]

3. 中野晴久 1993 「脚付扁平広口埴考～須恵器における地域性の考察～」『知多古文化研究』7

4. 西村美幸 1997 「伊勢湾西岸の製塩土器」『シンポジウム製塩土器の諸問題』資料集 塩の会シンポジウム実行委員会



1 . 全景



2 . 全景 (北から)



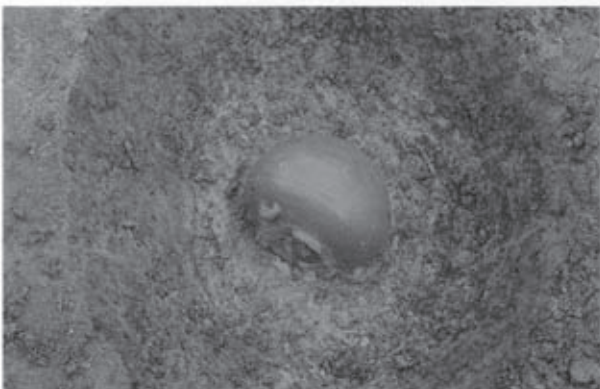
1. 大溝 SD 2 (東から)



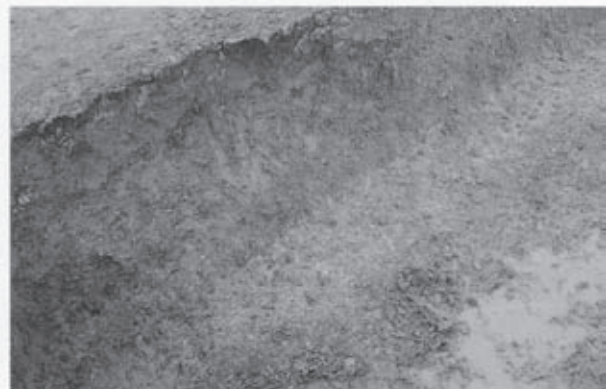
2. 大溝 SD 2 作業風景 (南東から)



3. 大溝 SD 2 (南東から)



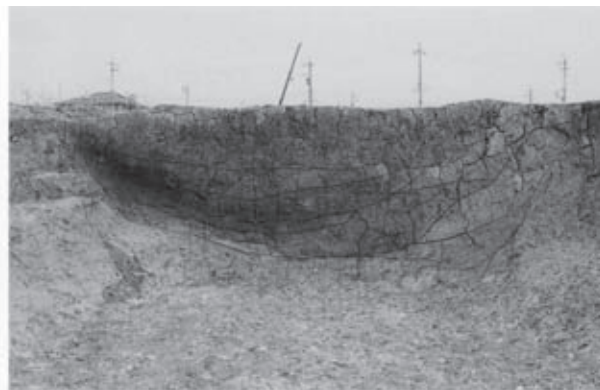
4. 大溝 SD 2 遺物出土状況



5. 杭穴検出状況



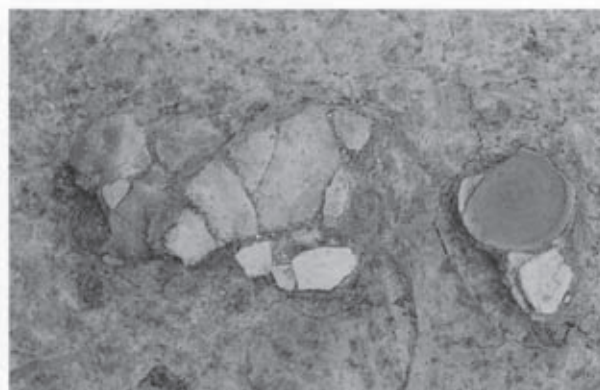
1. 大溝 SD 2 土層断面 A - A' (北西から)



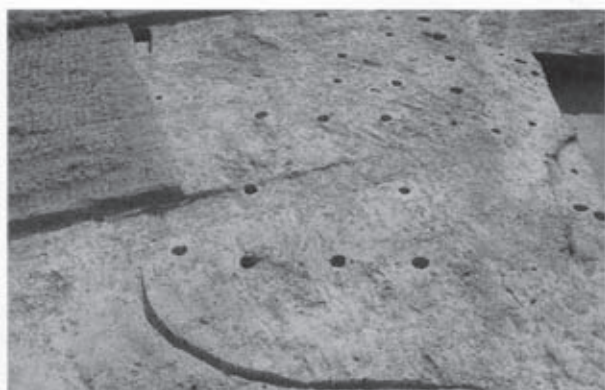
2. 大溝 SD 2 土層断 B - B' (南東から)



3. 竪穴住居 SH1 (南から)



4. 竪穴住居 SH1 遺物出土状況 (西から)



5. 掘立柱建物 SB9 (北から)



6. 現地説明会 (北から)



7. 須恵器蓋 (1)



8. 須恵器蓋 (4)



1 . 須惠器蓋 (6)



2 . 須惠器坏 (11)



3 . 須惠器坏 (12)



4 . 須惠器坏 (13)



5 . 須惠器坏 (14)



6 . 須惠器長頸壺 (21)

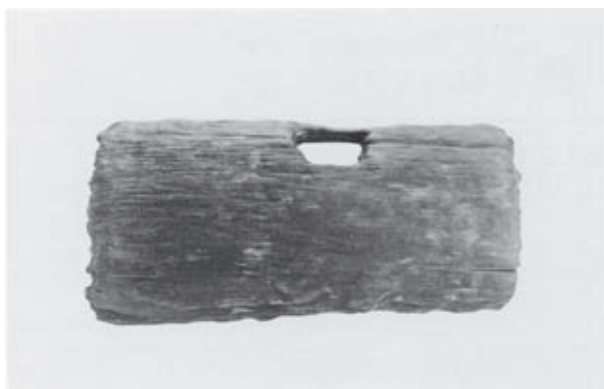


7 . 須惠器 (22)



8 . 須惠器壺 (23)

噐



1 . 木錘 (28)



2 . 須恵器脚付短頸壺 (50)



3 . 須恵器高坏 (56)



4 . 須恵器甗(59)



5 . 土師器高坏 (67)



6 . 須恵器蓋 (73)



7 . 須恵器壺 (22)



8 . 軒平瓦 (81)

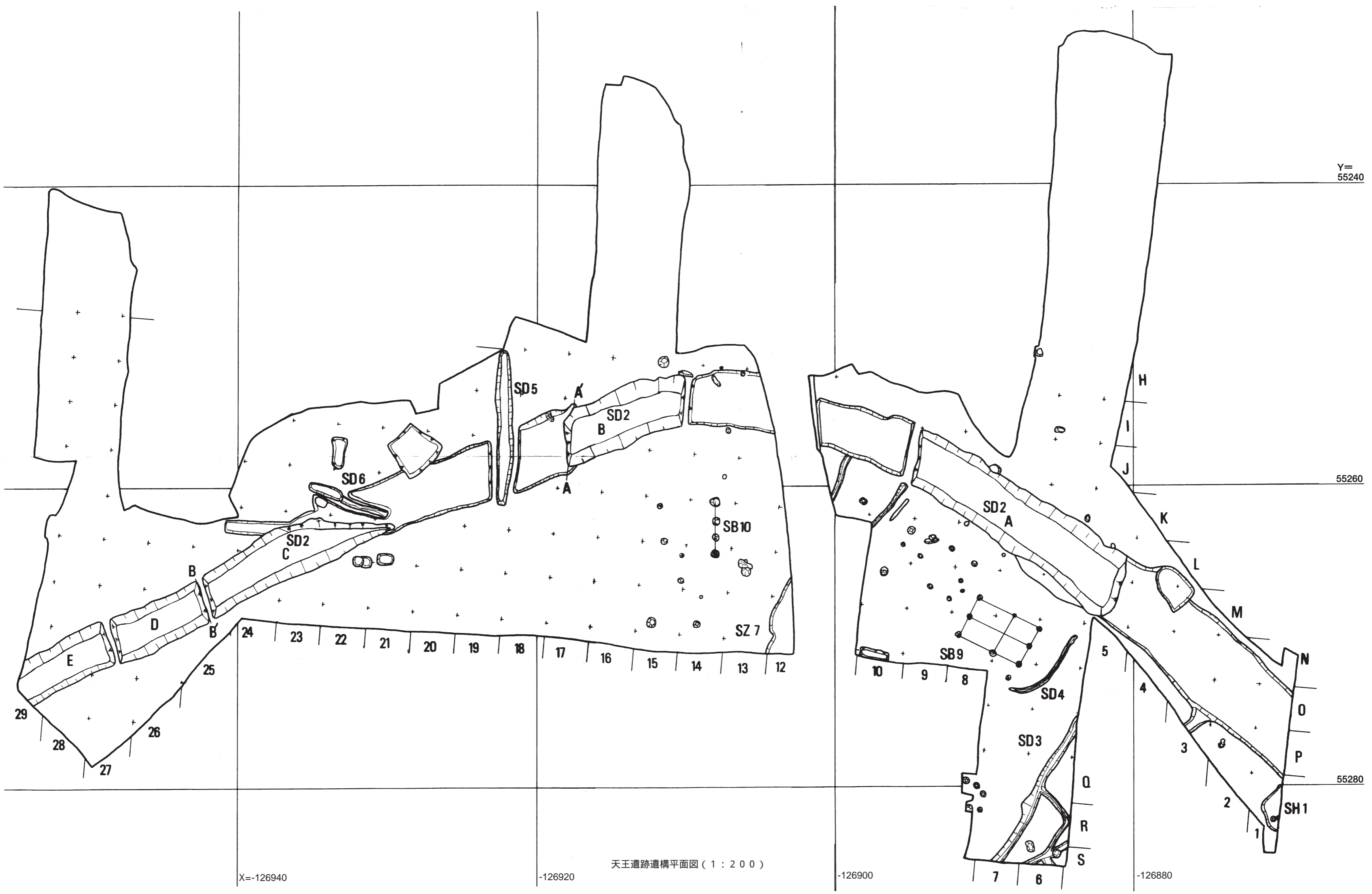
報告書抄録

ふりがな	てんのういせきだいがじはくつちょうさほうこく							
書名	天王遺跡第5次発掘調査報告							
編著者名	とよだしょうぞう につた つよし 豊田祥三 新田 剛							
編集機関	鈴鹿市教育委員会 鈴鹿市考古博物館							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町224番地 TEL 0593(74)1994							
発行年月日	西暦2002年1月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんのういせき 天王遺跡	三重県鈴鹿市岸 岡町字天王 3132-6	24207	843	34° 51′ 19″	136° 36′ 22″	19990107) 19990327	2,000㎡	宅地造成
	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物		特記事項		
	集落・ 官衙	古墳	大溝	土師器・須恵器 (蓋坏・高坏・ 脚付短頸壺など) ・木錘・瓦		官衙あるいは居宅に伴う可能性があり、かつ運河としての機能が想定できる大溝が検出された。		

天王遺跡(第5次)発掘調査報告

発行日 2002年1月31日
 編集・発行 鈴鹿市教育委員会
 鈴鹿市考古博物館
 〒513-0013
 三重県鈴鹿市国分町224番地
 TEL 0593(74)1994
 FAX 0593(74)0986
 e-mail: kouko@city.suzuka.mie.jp
 URL: http://www.edu.city.suzuka.
 mie.jp/museum

印刷 早川印刷株式会社



Y= 55240

55260

55280

X=-126940

-126920

-126900

-126880

天王遺跡遺構平面図 (1 : 2 0 0)